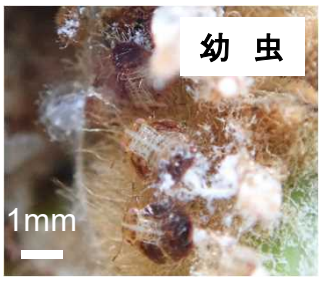
ビワキジラミの生態と防除対策

【背景・目的・成果】
平成29年に本県で初確認された新奇害虫「ビワキジラミ」は、ビワ果実に「すす症」を生じさせ、商品価値を著しく損なわせます。本種の生態は不明な点が多く、薬剤防除を実施しても防除効果が得られない事例があり、被害拡大が懸念されていました。そこで、本種の特徴や有効な防除対策を明らかにしました。

ビワキジラミとは

兵庫県でこれまで発生してなかった新奇害虫
幼虫が出す排泄物（甘露）にカビ（糸状菌）が繁殖し、「すす症」を発生させる



特徴①　小さく、びわに似た色彩のため発見困難
- 成虫はセミを小さくした外見で、葉脈間に潜む
- 幼虫は扁平で、花蕾などの隙間に生息

特徴②　「びわ」にしか生息せず、秋～春に活動
- びわに特化した、スペシャリスト害虫
- 低温に適性（冬でも生育可）→夏は休眠
- 休眠後、3世代を経過し、収穫期の被害に繋がる

防除のポイント

ポイント①　適期の防除が重要

11月中下旬は、ビワキジラミが花蕾に集まり、花蕾が膨らみ始め隙間が大きくなり、薬液が虫体に届く。摘蕾すると、さらに届くようになる。

3～4月の袋掛け前の時期は、「すす症」被害を防ぐために重要。
摘果すると、さらに薬液が届きやすくなる。

ポイント② 花蕾へ効率良く散布
長尺や鉄砲ノズルを用い、花蕾めがけて散布

ポイント③ 量をたっぷりと散布
400L/10a以上散布（虫体にかかることが重要）

ポイント④ 適切な薬剤の選択
時期別　効果の高い薬剤
11月中下旬　ピリダベン水和剤
袋掛け前　　ジノテフラン顆粒水溶剤

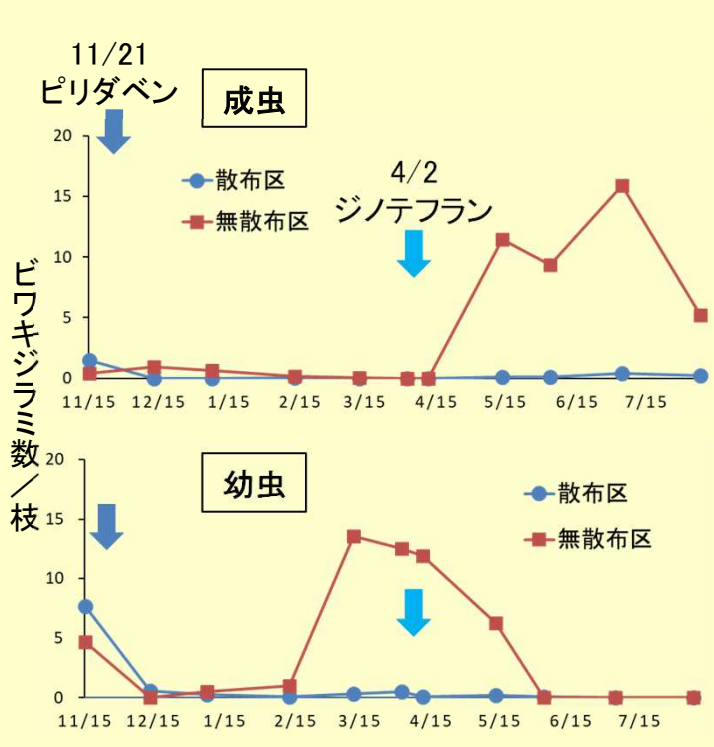


図　適期散布によるビワキジラミ防除効果

ポイント⑤ 薬液の付着をよくするため展着剤を加用

【技術の活用】この対策は、「適期に適剤を適切な方法で散布する」という薬剤防除の基本技術であり、研修会などを活用して普及センターなど関係機関とともに普及しています。

兵庫県
Hyogo Prefecture
兵庫県立農林水産技術総合センター
農業技術センター

研究成果紹介
動画サイト